

子抱き富士

森水陽一郎

登場人物

吉沢美佐（27）	初期の妊婦
佐伯久司（61）	キャンプ場オーナー
佐伯勇人（32）	久司の息子
戸塚健二（46）	美佐の不倫相手
戸塚淳子（43）	健二の妻
戸塚あずさ（13）	健二の娘
その他の人物	看護師
	スーツ姿の男性
	勇人の妻と息子

（6327文字）

○産科医院・外

扉が勢いよく開き、吉沢美佐（27）。
逃げるような足取りで、医院をあとに。
背後を気につけ、小走りで去っていく。

○公園

ぼんやりとベンチに腰かける美佐。
視線の先には、遊具で遊ぶ幼児と母。
美佐、ポケットからスマホを出し、
「T・自宅」という登録名にかける。

○戸塚家・リビング

固定電話が鳴り、ソファで野球を見
ている健二（46）が、キッチンに、

健二「おーい、電話」

淳子（43）「はい」

娘のあずさ（13）、健二のそばでス
マホをいじりながら、

あずさ「パパが出ればいいじゃん」

健二「いまいとこなんだよ」

淳子、エプロン姿で受話器を取り、

淳子「はい、戸塚でございます」

無言。

淳子「もしもし？」

○公園

じつとかたまったままの美佐。
かすかに聞こえるテレビの音。

○戸塚家・リビング

淳子「もしもし？」

無言。

淳子「あの、どちら様で——」

電話が切れる。

淳子「もう」

あずさ「いたずら？」

淳子「なんにも言わないの」

あずさ「（ふざけて）あれじゃない？ パ。パ。

の不倫相手とか」

健二「どうしてわかった？」

あずさ「なわけないか、そのお腹で」

と、健二の太鼓腹を叩く。

○公園

お腹にそっと手をあてる美佐。

○タイトル『子抱き富士』

○精進湖・全景（夕）

富士山を背にした夕暮れの湖。

○キャンプ場・駐車場（夕）

湖畔の駐車場に、一台の車が乗り入れ。
運転席から降りる美佐、思いつめた顔。
バッグを手に、敷地の奥に向かう。

○同・バンガローエリア（夕）

屋根の修繕をする佐伯久司（ひさし）（61）。

美佐がおとずれ、

美佐「あの一」

久司、トンカチの手をとめ、

久司「いらっしゃい」

美佐「飛び込みなんですけど」

久司「一人かい？」

美佐「はい」

久司「内風呂ないし、飯も出ないよ」

美佐「大丈夫です」

久司「予定は？」

美佐「えっ？」

久司「何泊？」

美佐「一泊、だと思います」

久司「思いますって」

はしごを降りてきて、

久司「変なこと、考えてないよね」

美佐「えっ？」

久司「違うならいいけど。で、どうするつもり？ コンビニ、じきに閉まるよ」

美佐「ああ、適当に、そのへんは」

久司、受け流して、奥に歩き出す。

○同・管理棟・室内（夕）

カウンターで書類に記入する美佐。

書き終えて、

美佐「あの、書きました」

久司、二つのコーヒーカップを手に奥から姿を見せ、書類に目を落とす。

久司「東京」

美佐「ええ」

久司「なんでまた精進湖に？」

美佐「あつ、えーと」

久司「ああ、言わんでいい、嘘なら」

美佐「……」

久司「まあ、飲みな」

と、カップを一つ差し出す。

美佐「あつ、コーヒーは」

久司「嫌いかい？」

美佐「いえ、そうじゃないんですけど。あつ、先にお金を」

はぐらかし、財布を取り出す。

○同・バンガロー・室内（夕）

入室した美佐、バッグを床に置いてぺたんと座り、深々とため息をつく。畳まれたそばの布団に、崩れ落ちるように横倒しに身をあずける。

○同・バンガロー・外（夕闇）

美佐、ポーチを手に扉から出てくる。スマホのライトをたよりに、湖畔へ。

○湖畔（夕闇）

水辺にしゃがんだ美佐。

すぐ足下で燃える、小枝の山。

美佐、炎のなかに、妊娠検査スティックをそつと差し入れる。

陽性を知らせる二本の赤ライン。

徐々に形を失い、ラインごと消える。

美佐、ふと対岸に目をとめ、立ち上がる。

暗く沈んだ対岸の森に、ちらちらと揺れる小さな明かり。

じつと目を凝らす美佐。

スマホの着信音で我に返る。

ポケットから出し、表示に動揺する。

「T・スマホ」からの着信。

美佐「もしもし」

○住宅街（夕闇）

健二、リードつきの犬をそばに、あたりを気にしつつ、スマホに、

健二「僕だ」

○湖畔（夕闇）

美佐「何？」

健二（声）「電話、くれただろ？ 今日の昼」

美佐「富士山」

健二（声）「えっ？」

美佐「いま、樹海のそばにいるの。じゃあ」

健二（声）「ちよっと待てよ」

美佐「何？」

健二（声）「悪かったと思ってる。いきなり切り出して」

美佐「気にしてない。終わったことだから」

○住宅街（夕闇）

健二「だったら何で、電話なんか」

沈黙。

健二「迎えに、いけないぞ」

通行人「こんばんは」

スーツ姿の男性、健二に会釈して、そばの門扉に手をかける。

健二、どきまぎしつつ会釈を返す。

美佐（声）「伝えたかっただけ、禊みそぎをするって」

健二「何するって？」

○湖畔（夕闇）

美佐「禊」

健二（声）「どういう意味だよ」

美佐「明日にはわかる、こうご期待」

健二（声）「おい、美佐——」

美佐「さよなら」

通話を切り、「T・スマホ」「T・自宅」
の登録を、続けて消去する。

美佐、深々と息を吸い、

美佐「あー！」

湖に向けて叫び、足下の石を投げる。

○キャンプ場・共同炊事場（夜）

湖畔から戻る美佐を、久司が見つけ、

久司「おい、べっぴんさん。食ってかないか」

こんがりと焼き上がったソーセージ。

美佐「いや、私は」

久司「遠慮しなさんな、ほら」

手際よくバンズにはさみ、仕上げる。

困惑しながらも、受け取る美佐。

一口かじり、

美佐「おいしい」

久司「（満足げに）ビールは？」

美佐「はい。……あつ、いいです」

久司「出かけるのか？」

美佐「いや、そうじゃないんですけど」

久司「コーヒーもだめで、ビールもだめ。なんだか妊婦さんみたいだな」

美佐「……」

久司、椅子をそっと差し出す。

久司「わけありかい？」

美佐、一礼して腰かけ、

美佐「……あの」

久司「ん？」

美佐「さつき、光が見えたんですけど」

久司「光？」

美佐「湖の対岸。森の中に」

久司「ああ、たぶんうちのせがれだ。去年の

夏、沢の事故でな。嫁さんと、五歳の息子、
一緒になくしたんだ」

美佐「……」

久司「初めての沢登り、もちろんライフジャケットも着てた。だから余計に流されてな」

○（回想）森・溪流

ゆるやかな岩の斜面をのぼる佐伯^{ゆうと}勇人。

ふいに上流から、大きな流木が現れる。
身をかがめてよけ、下流に目を向ける。
妻と息子めがけて、流木が落ちていく。

○キャンプ場・共同炊事場（夜）

久司「息子は自分を責めた。沢に誘ったこと。
二人を救えなかったこと」

缶ビールを喉に流し込んで、

久司「会社辞めて、二ヶ月かけて四国のへり
を歩いて、いまではああして、森の中で仙
人みたいに暮らしてる。それで、生きてる
ことを知らせるために、夜になるとランプ
を灯すんだ」

美佐「あの」

久司「ん？」

美佐「どうして、森の中に」

久司「さあ、なんでだろうな」

○同・バンガロー・室内（深夜）

明かりの落とされた室内。

布団の中で横になる美佐。

天井をじっと見つめている。

○（回想）産科医院・待合所

長椅子に腰かける何人かの妊婦。

思いつめた表情で端に腰かける美佐。

看護師「吉沢さん、吉沢美佐さん」

美佐、身を固くして返事をしない。

ふいに立ち上がり、前のめりで逃げる。

○バンガロー・室内（深夜）

美佐、布団の中から右手を出す。

その手をお腹のあたりに持つていく。

布団の上から、静かにお腹をさする。

やがてその手が、握りこぶしに変わる。

ポン、ポンと、軽く叩き始める。

徐々にその力が強くなっていく。

美佐、思わず顔をゆがめ、ワツと泣く。

○湖畔・貸しボート小屋・外（早朝）

開店の準備をする勇人（32）。

ぼさぼさ髪に、不精ひげ。

手ぶらの美佐がおとずれ、

美佐「あの」

勇人「はい？」

美佐「乗りたいんですけど」

勇人「一人？」

美佐「はい」

勇人、じっと美佐を見る。

美佐「だめ、ですか？」

勇人「いや」

○同・ボート棧橋（早朝）

ライフジャケットをつけた美佐。

ボートに乗り込み、オールを握る。

勇人「気いつけて」

ボートのへりをそつと押す。

美佐、ぎくしゃくしたオール操作。

徐々にこつをつかみ、湖畔を離れる。

真顔でじつと見送る勇人。

○同・貸しボート小屋・室内（夕）

勇人「ありがとうございましたー」

釣り人を見送り、掛け時計に目をやる。

午後四時五〇分。

○同・ボート棧橋（夕）

勇人、棧橋まできて、湖を見渡す。

ひと気のない、夕暮れの湖面。

勇人、そばのボートに乗り込み、なれ

た手つきでこぎ出す。

○湖上（夕）

ボートに仰向けで寝そべる美佐。

大きく息を吐き、覚悟を決めた顔つき

でむくりと起き上がる。

ライフジャケットを脱ぎ、よろめいて
立ち上がる。

息を吞んで、湖面をじっと見下ろす。

○同（夕）

勇人、遠くに美佐のボートを見つけ、

勇人「おーい！」

振り向く美佐。

一礼し、そのままドボンと飛び込む。

勇人「あっ！」

あせった手つきで、オールをこぐ。

「ガコン」と、オールを固定する器具
が片方壊れる。

勇人「チッ、なんだよ！」

無理矢理こぎ進めるがうまくいかない。
湖に飛び込み、美佐のもとへ。

○同（夕）

美佐、死にきれず、湖面を必死にかく。

繁茂した藻が、腕や首にからまり、

美佐「ひっ！」

動いたばかりにつき、溺れかける。

美佐「たす、けて」

そばまできた勇人、美佐をかかえるが、

勇人「いてっ、暴れんたって！」

どうにか背後から救助し、ボートのへりをつかませる。

○湖畔・貸しボート小屋・室内（夕）

頭からバスタオルをかぶった美佐。

憔悴して椅子に腰かけ、茶をすする。

仏頂面の勇人、スマホの操作を始め、

美佐「待って」

勇人「はっ？」

美佐「警察」

勇人「違うよ、そのままじゃ風邪引くだろ。

あつ、もしもし、俺だけど」

バックヤードに姿を消し、シャツとズ

ボン、白いレジ袋を手に戻る。

押しつけるように美佐に手渡す。

勇人「（電話相手に）そう、いまから」

美佐に向けて、「着替えろ」の手振り。

勇人「うん、急で悪いけど」

戸口から出て、扉が閉められる。

一人残された美佐。

しわくちやの着替えをじつと見る。

○同・貸しボート小屋・外（夕）

着替えをすませた美佐、膨らんだレジ

袋を手姿に見せる。

勇人、うなずき、扉に鍵をかける。

美佐「あの」

勇人「車で聞く」

○湖畔・国道（夕）

夕日を浴びて走る軽トラック。

○走行中の車内（夕）

勇人、運転しながら、

勇人「待ってただろ」

美佐「えっ？」

勇人「俺が迎えにくるの」

凶星の沈黙。

勇人「来たときから、なんとなくわかった。

おんなじ目してたから、俺と。でもあんた

は、助けを求めた。あのとき水の中で、生

きたって願った」

美佐「あの」

勇人「俺は何も聞かないし、聞きたくもない。

自分のことで、手一杯だから」

美佐、ふと思いあたり勇人の顔を見る。

勇人「何？」

美佐「いえ。……すみません」

○キャンプ場・駐車場（夕）

軽トラックから降りる勇人と美佐。

すでに久司が待っていて、

久司「あれ？ 君は――」

勇人「知り合い？」

久司「お客さんだ」

勇人「じゃあちようどいい、あとは頼んだ」

久司「ああ、ちよつと」

勇人「ん？」

久司「ついでに食ってけ、たくさん作ったから」

○同・管理棟・室内（夕）

テーブルをはさんで勇人と美佐。

久司、ほうとうの大鍋を手に姿を見せ、

久司「あったまるぞー、ささ、どうぞ」

野菜たっぷり。立ちのぼる湯気。

勇人、自身の分を取り分け、

勇人「いただきます」

豪快にすする。

かたまったままの美佐。

勇人「しゃあねえな」

美佐の分を取り分け、

勇人「ほら」

美佐、頭を下げて小鉢を受け取る。

美佐「いただきます」

噛み味わって食べ始める。

鼻水をすすり、ふと手をとめる。

頬を伝う涙。

手でぬぐうが、とまらない。

勇人、ティッシュの箱をそつと置く。

× × ×

食べ終わったほうとうの大鍋。

勇人、「フー」と息をつき、

勇人「ごちそうさん。じゃあ、あとは」

と、席を立つ。

久司「ごくろうさん」

美佐、あわてて立ち上がり、

美佐「あの」

勇人、後ろ手を振り、戸口をあとに。

おもむろに腰を下ろす美佐。

久司「少しは、落ち着いたかい？」

美佐「すみません」

久司「ん？」

美佐「ご迷惑かけて」

久司「浅いし、ぬるい」

美佐「えっ？」

久司「精進湖の水」

美佐「ああ」

久司「ときには、なりふりかまわず泳いでみ
たくなる」

美佐「……」

久司「うちのが死んだときも、ああ、勇人の母親のことだが、あいつ、藻に足を取られながらも、対岸まで泳ぎきった。十六だったかな」

美佐「……私」

久司「ん？」

美佐「妊娠してるんです」

久司「ああ」

美佐「堕ろすつもりでした。でも、だめでした。病院まで、行っただけですけど」

久司「勝手だね。産めない。でも一人では、逝かせたくなかった」

美佐「……」

久司「俺は嫌いじゃない。そういう馬鹿げた、人間くさい愛情の間違い方。さいわいまだ、取り返しもつくしな」

美佐「すみません」

久司「謝る相手が、違ってるな」

美佐、自身のお腹を見下ろす。

久司「生きると死ぬ、その瀬戸際でも、コーヒーとビールを飲まなかった。それが、答えじゃないかい？」

美佐「……」

久司「さあ、今日はもう店じまいだ。あした

は早起きだぞ」

美佐「えっ？」

久司「案内するよ、秘密の場所に」

○同・バンガロー・室内（早朝）

薄暗がり、布団で眠る美佐。

扉のノックで目を覚ます。

久司（声）「おはよう、起きてるかい？」

美佐、ねぼけつつ、

美佐「あつ、はい」

○同・駐車場（早朝）

ワゴン車に乗り込む久司と美佐。

○走行中の車内

久司、運転しながら、

久司「眠れたかい」

美佐「はい」

久司「昨日の話」

美佐「えっ？」

久司「勇人の、亡くなった嫁さんと、息子」

美佐「ああ、はい」

久司「ぎゅっと抱きしめた格好で、見つかつ

たんだ。流れから、子供を守るようにして」

美佐「……」

久司「由美さんと、翔吾。あの日以来、もう名前を呼べなくなった。なんだか、引き留めるような気がしてな。二ヶ月かけた勇人のお遍路を、台無しにするように思えてな」
ルームミラーに結ばれたお守り。

お遍路さんの刺繍が笑って揺れる。

久司「余計なお世話かもしれんが、これも何かの縁だ。どうか、守ってやってください。早まって、手を放さんでください。後悔せんように」

○湖畔・国道（早朝）

路肩に停車するワゴン車。

そばの森に、登山道の案内板。

久司と美佐が降り、登山道へ。

○森・登山道（朝）

坂道をのぼる久司と美佐。

○同・高台（朝）

久司と美佐、息を切らせて姿を見せる。
見晴らしのいい高台に、使い込まれたテントが張られている。

そばに吊るされた、炎の消えたランプ。
久司、湖ごしの富士山を見て、

久司「そろそろかな」

富士山すその稜線から、朝日が昇る。
息を吞んで、じっと見つめる美佐。

久司「手前に、ちっさい山があるだろ」

美佐「はい」

久司「何かに、見えないかい？」

美佐、ふと思ひあたり、

美佐「富士山の、子供」

久司「あの姿を昔から、『子抱き富士』って
言うんだ」

美佐「子抱き、富士」

久司「そう、子供をいなく、子抱き富士。再
出発の場所には、ぴったりだろ？」

美佐「……はい」

久司「自信を持って、言えるかい？」

美佐「はい」

久司「うん、そうか」

しみじみとうなずき、背後のテントに、

久司「おい、空海さん、朝だぞ」

テントから反応はない。

久司「聞いてんのか、おい」

テントに近づき、フアスナーを下ろす。
しぼんだ寝袋で、無人。

久司「あれ？」

と、あたりを見まわす。

美佐「あっ」

湖の一点を凝視する。

久司「どうした？」

美佐「あれって」

と、薄暗い湖上を指差す。

久司「あっ！」

湖上を泳ぐ、小さな黒い点。

○湖上（朝）

着衣のまま、クロールで泳ぐ勇人。

行く手には朝焼けの子抱き富士。

髪を短く刈り、ひげも剃っている。

○森・高台（朝）

久司「（目をこらし）勇人か？」

美佐「だと思えます」

久司「よし、行くか？」

美佐「はい」

二人、早足で高台をあとに。

○湖畔（朝）

ワゴン車が路肩に乗り入れ、停車。

久司と美佐が降り、水辺まで小走り。

クロールの勇人、徐々に近づいてくる。

浅瀬にたどり着き、よろめいて歩く。

久司、足下を濡らして迎えにいき、前のめりで崩れた勇人を抱きとめる。

久司「ばかもん」

苦笑いの勇人、肩を借りて岸へ。

息もたえだえ、仰向けに寝ころがる。

そばの砂利を無造作につかむ。

美佐にこぶしを差し出し、

勇人「やるよ、記念に」

美佐「えっ？」

勇人「誕生日だ、あんたと俺の」

手をひらくと、パラパラと砂利が落ち、

緑色の美しい石が、そこに残る。

石にそっと伸ばされる、美佐の手。

【完】